

学校教育現場における先生方の誠実な頑張りや、前述のような「二次的な構図」や連携の難しさ、謙遜を美德とする日本の文化（？）などによって、家庭や地域に伝わりにくい一面があります。

しかし、学校教育の場では、親御さんごその場におられたならば、目頭がじいんと熱くなるのではないかと、と思われる先生方の児童・生徒に対する親身な支援や細やかな配慮が見られます。



立科小学校児童昇降口の傘置き場

6月6日(水)に行われた立科小学校の校長講話は、その一例かと存じます。

三澤 豊 校長先生は、今春着任されてすぐに、児童昇降口の傘置き場の整然とした利用状況に甚く感心し、この良き校風を守り、児童の「直き心」をさらに豊かに育んでいきたい……と考えられたそうです。

そこで、この、学校長としての思いを校長講話で児童に伝えることにしました。初めに、上段の写真を全校児童に示し、感想・意見を求めました。

2年生のD子がさっと手を挙げました。校長先生が指名しますと、D子は、「傘の入れ方が曲がっています。」と発言しました。すると、体育館内が騒然としました。D子の発言に対する疑問や反論の声がわき上がったのです。

5・6年生を中心に、多くの児童が次々に挙手し、「ちよつと曲がっているけど、どの傘もきちんと入っていると思います。」「水滴が飛ばないように、ネームリボンで傘をしつかりまとめてあります。」「傘置き場の端から詰めて入れているので、後から利用する人が利用しやすいと思います。」など、D子の発言に否定的な感想・意見を述べました。

校長先生は、D子の心持が気になりました。D子の意見を擁護する発言が皆無で、D子は今、孤立無援の状態なのではないかと、と案じたのです。

そのため、校長先生はいったん、「活発な発言、ありがとう。いろいろな感想や意見が出ましたが、すべての発言が、この写真を真剣に見て、自分の感じたことや考えたことをはっきり述べてくれたもので、大変嬉しく思いました。」とまとめ、話題を転換しました。

「立科中学校の先生から、この春、立科小学校を卒業したE子さんの生活ノートのコピーをいただきました。その生活ノートには、『今朝、登校してくるときに、うれしいことがありました。それは、立科小学校の6年生が、うしろからあいさつをしてくれたことです。私は、去年ほとんど毎日、生活ノートにあいさつのことを自分のクラス、学年、全校を見て、書いていました。私が書いたことについて、何度もクラスで話し合いながらがんばっていました。そして、小学校を卒業した今でも、立小の成長を見ることができたのが本当にうれしかったです。だから、自分ももっと人にあいさつができるようにしていきたいです。』と書いてありました。皆さん、どう思いますか。」

多くの児童が挙手し、何人かの児童が自分の考えをはっきりと述べました。「中学生が、ぼくたち小学生のことをしっかり見てくれているということを知りました。ぼくも、これからきちんとあいさつしようと思いました。」

「わたしは、普段あまりあいさつをしません。でも、あいさつをすることでうれしいと言ってくれる人がいるので、これからは自分からあいさつしていきたいです。」などなど……。

15分間の校長講話が終わろうとする直前、D子が手を挙げました。

一瞬、校長先生の頭の中を先ほどの場面がよぎりました。反対意見が再びわき起こり、D子が押しつぶされなければいいが……。

しかし、それは杞憂でした。D子が、「私たちのクラスも、何か困ったことがあったら、しっかり話し合えるクラスになればいいな、と思います。」と発言し、体育館内が温かい共感の空気に包まれたのです。低学年のD子の発言が、あいさつに対する自分自身の反省と決意という「個の視点」でとらえていた全校児童に、視座の移動という斬新な気づきをもたらしたのでしよう。

校長先生は、D子の10数分間の幼くも真摯な葛藤、そして、確かな心の成長を実感し、嬉しさいじらしさを覚え、全校児童にそう語り伝えました。

年間6回実施される校長講話の一幕ですが、老生は、児童の幅広い発言を共感的に受容し、児童の内面の変容に一喜一憂される校長先生、並びに、先生方に心強いものを感じたことです。

教職員の不祥事が報道されるたびに、やり切れない思いにかられると同時に、誠実に頑張っている圧倒的多数の教職員までも同一視する大人社会の幼児化が歯痒く、残念でなりません。